

## 開講の辞

このたび、私は、二〇〇三年度の安居次講を拝命し、法然上人の主著である『選択本願念仏集』（以下『選択集』）を講究する機会を与えられた。

『選択集』は、時の関白九条兼実の請いに応じて著され、上人自らが率直かつ明瞭に念仏一道の選  
びを打ち出した記念碑的な教学書である。本書は、その題目が示しているように、「選択本願の念  
仏」について、その要文を集め、その要義を述べたものである。そのことは、先ず題号の次に、巻頭  
に掲げられている「南無阿弥陀仏・往生之業念仏為本」（『選択集』・真聖全一―九二九）という総標の  
語に明らかに示されている。この標擧の文字に『選択集』の全内容が語られているといえよう。とく  
にこの「念仏為本」の四文字は、菩提心為本の聖道門教学に対して掲げられた宣言とも受けとめられ  
る。実に法然は、「選択本願の念仏」に、仏陀釈尊一代の法門の帰趣を見出し、仏道の真の伝統を感  
得し、人間生活の始終を見出した。本書の出現を軸にして、日本仏教は大きな転換を迎えることにな  
ったのである。すなわち本書の撰述によって、長いあいだ寓宗の位置にあった浄土教は、独立を果し

遂げることになったのである。

しかし時節が熟しないとみた法然は、本書の末尾に

庶幾ハクハヒトタビ高覽ヲ経テ之後、壁ノ底ニ埋ミテ、窓ノ前ニ遺スコト莫レ。恐ラクハ破法之人ヲシテ、惡道ニ墮セ令メザランガ為也。

〔『選択集』結勸・真聖全一一九九三〜四〕

と記し、非公開の書とし、わずかに門弟数名に書写を許したにすぎなかった。それは、聖道門諸宗の人々から誤解と非難を浴びることを予感したからであった。

はたして、本書は、烈しい非難に晒された。法然存命中には三井寺の公胤が『浄土決疑鈔』三巻を著して謗難している。公胤は、学仏房を使者として、これを法然に送ったが、後に大いに前非を悔いたと伝えられる（『一期物語』『法然上人伝記』『醍醐本』『法然全四四五頁、法然伝全七七七八頁』）。

上人の存命中には、『選択集』は、公刊されることがなかったので、本書が直接に破却されることはなかったが、専修念仏運動が興隆し、吉水の念仏教団に多くの人々が参集し、やがて聖道門諸教団の勢力と拮抗するようになると、法然の主張は、度重なる非難に直面することになった。その専修念仏の主張は、念仏の弾圧までに発展した。

元久元年（一二〇四）には、延暦寺の大衆が念仏停止を座主真性に訴えた。これを憂えた法然は、『七箇条起請文』を座主に送って事なきをえた。いわゆる「元久の法難」である。ところが、翌二年

には、解脱房貞慶が、興福寺の衆徒を代表して、九ヶ条の過失を挙げて、念仏停止を朝廷に訴えた。

これに対して朝廷は、院宣を下して、門下の邪見や破戒を禁止し、法本房行空、安樂房遵西を召し捕らえるなどして対応したが、興福寺衆徒はこれに満足しなかった。またこの年には、安樂、住蓮が死罪に処せられている。この間、法然の帰依者である九条兼実による弾圧回避に向けての尽力があったが、ついに承元元年（一二〇七）、念仏停止の院宣が下り、法然は、土佐に配流されることになった。「承元の法難」と呼ばれる大弾圧がこれである。ここに法然以下七人の流罪、また四人の死罪によって、吉水の教団は解散するにいたったのである。このような弾圧にも屈せず、上人は、

われたとひ死刑にをこなはるとも、この事いはずばあるべからず。

〔『法然上人行状絵図』第三十三卷・法然伝全二二七頁〕

と、本願の念仏による無条件の救済を必死の覚悟で説くのである。

建暦二年（一二二二）、法然が入滅したあと、『選択集』が公刊されると、たちまち非難攻撃の渦が巻き起こった。その急先鋒となったのは、梅尾の明恵上人高弁であった。明恵は、自ら『摧邪輪』を著して『選択集』を攻撃したのであるが、その主な理由は、法然が発菩提心を無用とし、また二河白道の譬を釈して、聖道門を群賊悪獸に喩えたからであった。聖道門の立場からすれば、明恵が法然を弾劾したのも無理もないことであつたかもしれない。しかし法然からすれば、菩提心さえ発すことの

できない罪惡生死の凡夫を救済するのが、本願の念仏であり、念仏を末法に生きる凡夫救済の灯明として掲げることは、何よりも大きな使命であった。

法然上人入滅後も、専修念仏への迫害・弾圧は、緩まることはなかった。

上人の没後、順徳院の御宇 建保、後堀川院の御宇 貞応・嘉祿、四条院の御宇 天福・延応、たびたび一向専修停止の勅をくださる、事あり…。

〔同〕第四二卷・法然伝全二六四頁

と伝えられる。上野から比叡山に登った定照は、法然の念仏弘通をねたみ、『彈選撰』を著して、『選撰集』を非難し、隆寛に送ったところ、隆寛は『顯選撰』をもって反駁し、これに怒った叡山の大家は、嘉祿三年（一二三二）六月、専修念仏の停止と隆寛の流刑および大谷墳墓の破却を決議・上奏し、勅許を得た。七月には、隆寛・幸西という遺弟がそれぞれ遠流に処せられた。いわゆる「嘉祿の法難」である。

このような数多くの法難をくぐって、『選撰本願念仏集』は、法然の遺弟に護られ、日本全土に真宗興隆の機縁を熟せしめ、日本仏教の貴重な歴史的転回軸となったのである。

吉水門流の課題は、聖道門による『選撰集』への謗難にいかにか答えるかということにあった。とくに、『摧邪論』、『摧邪輪莊嚴記』を著して、『選撰集』を厳しく批判した華嚴宗の明恵の論難にいかにか応えるかということとは大きな課題であった。

その遺弟として、大きな使命のなかに生きた仏者が宗祖・親鸞聖人であった。聖人は、その若き日、法然上人に邂逅し、

上人のわたらせ給はん処には、人はいかにも申せ、たとひ悪道にわたらせ給べしと申とも、世々生々にも迷ひければこそありけめ。

〔恵信尼消息〕五・真聖全五一〇五

と告白するほどに、絶対的な帰依の心をもって、その教えを信受したのである。吉水で修学した親鸞は、元久二年（一二〇五）四月十四日に、師より、『選撰集』を付属された。聖人は、主著『教行信証』後序において、法然の浄土宗興行、承元の法難、法然の帰洛・入滅、建仁元年の親鸞の帰本願、元久二年の『選撰集』書写、真影凶画、夢告による改名、などについて詳細に銘記し、本書との出遇いを深い感激をもって回想している。

吉水門下で活動した親鸞は、「承元の法難」に連座し、越後流刑の身に処せられた。この処置は、法然の教えへの誤解と諸大寺院への朝廷の政治的配慮、そして後鳥羽上皇の私怨などが重なって下された非道な断罪であった。聖人は、この不当な弾圧を、

主上臣下、法二背キ義二違シ、忿ヲ成シ怨ヲ結フ。

〔教行信証〕後序・『定本親鸞聖人全集』一一三八〇

と厳しく批判している。『教行信証』の執筆にあたっては、この「承元の法難」が大きな契機となっ

たと考えられる。本書の成立年時については、古来化身土巻の

我カ元仁元年申

〔教行信証〕化身土巻・『定本親鸞聖人全集』一―三―四

という記銘が注意されているが、この元仁元年（一一二四）の年記は、建暦二年（一一二二）に入滅した法然上人の十三回忌の年に当る。このことから『教行信証』の草稿本は、元仁元年に完成したという説がある。まさに『教行信証』は、『選択集』の課題を承けて、『選択集』への疑難に応えるとともに、浄土宗を真宗として公開せんという高い志願のもとに執筆された書である。ここに親鸞聖人の畢生の使命があつたことを窺わずにはいられない。

このたびの安居では、はからずも、このような歴史的意義をもった『選択集』を講究するという貴重な縁を頂いた。私は、数多くの苦難を経て伝えられてきた本書を虚心に拝読し、また宗祖親鸞聖人が「よきひと」（『歎異抄』第二章）と仰がれた法然上人の教学の一斑を、懸席された聴者の皆様とともに、心して学びたいと深く念じている。

二〇〇三年七月十六日

## 目次

### 開講の辞

#### I 文前緒言

- 一、法然の求道…………… 3
- 二、『選択集』の撰述…………… 11
- 三、『選択集』の根本関心…………… 17
- 四、『選択集』の概要…………… 30

#### II 本文

- 序章 題号・標宗…………… 43
- 一、題号…………… 43
- 二、標宗…………… 47

第一章 教相……………52

一、三経一論……………52

二、危機意識……………55

三、仏道史観……………59

第二章 念仏……………67

一、称名……………67

二、二行の得失……………74

三、法然と善導……………78

第三章 本願……………83

一、選択本願の念仏……………83

二、「選択」の思想……………92

第四章 信心……………98

一、菩提心……………98

二、三心……………103

三、信と戒……………108

III 法然と親鸞

——『選択集』から『教行信証』へ——

一、よきひと……………117

二、『選択集』の付属……………118

三、『選択集』と『教行信証』……………125

付説『選択集』のテキスト

一、『選択集』の刊本……………137

二、『選択集』をめぐる諸書……………140

三、その他の史料……………145

跋……………147

## 凡 例

- 一、法然上人の著述の引用は、石井教道篇『昭和重修法然上人全集』（平楽寺書店刊）、『真宗聖教全書』一、四（大八木興文堂刊）によった。また伝記については、井川定慶集『法然上人伝全集』（法然上人伝全集刊行会刊）によった。
- 一、親鸞聖人の著述の引用は、『教行信証』については、親鸞聖人全集刊行会編『定本親鸞聖人全集』（法蔵館刊）に、また『教行信証』以外については、『真宗聖教全書』二を用いた。また法然以外の真宗の七祖また列祖等の著述については、『真宗聖教全書』一、三、四、五を用いた。
- 一、引用に当って、『真宗聖教全書』は「真聖全」、『昭和重修法然上人全集』は「法然全」、『法然上人伝全集』は「法然伝全」と略記した。浄土宗の釈義書としては、『浄土宗全書』・『統浄土宗全書』（山喜房仏書林刊）を多く用いたが、「浄全」・「統浄全」と略記した。
- 一、原漢文のものは延べ書き文としたが、必要に応じて、漢文表記とした。旧漢字は、可能な限り現行字体に、旧仮名遣いも現行字体に改めた。

## I 文前緒言

## 一、法然の求道

### a. 法然の課題

法然の生涯を尋ねる場合、数々の伝記が問題になるが、初期の法然伝は、『源空聖人私日記』・『法然上人伝記（醍醐本）』・『本朝祖師伝記絵詞』、もしくは『法然上人伝記（醍醐本）』・『源空聖人私日記』・『知恩講私記』・『本朝祖師伝記絵詞』の順に成立したと考えられる。<sup>①</sup> これらの過去の法然伝を集成した『法然上人行状絵図』（四十八巻伝）は、内容的に充実し、それゆえ最も流布している。

法然が、その八十年の生涯において遭遇した重大な事件としては、事柄の取り扱いの軽重はあるにせよ、(1)父時国の急死、一家の離散、(2)比叡登山、(3)専修念仏帰入、(4)土佐配流、という四つの事柄を挙げることができるであろう。<sup>②</sup>

このうち、父時国の急死（九歳）、比叡登山（十三歳）、専修念仏帰入（四十三歳）は、法然の精神形成において最も重大な事柄であったと思われる。<sup>③</sup>

まず最初の、父の急死は、法然の生涯の原点となる出来事である。美作の押領使時国の子として生まれた法然は、永治二年（一一四二）、所領の争いがもとで明石定明の夜襲に遭い父を喪う。

時国ふかき疵をかうぶりて死門にのぞむとき、九歳の小児にむかひていはく、汝さらに会稽の耻をおもひ、敵人をうらむる事なかれ、これ偏に先世の宿業也。もし遺恨をむすば、そのあだ世々につきがたかるべし。しかしはやく俗をのがれいゑを出で、我菩提をとぶらひ、みづからが解脱を求にはといひて端坐して西にむかひ、合掌して仏を念じ眠がごとくして息絶にけり。

〔法然上人行状絵図〕第一卷・法然伝全六頁

法然は、眼のあたりに目撃した生死無常の悲惨な現実を深く胸に刻み、臨終の父の遺言に随つて仏道に入る。この生死無常の自覚が、法然の求道の出発点にはかならなかつた。すなわち肉親の死に遭つた法然にとって、「出離生死」という問題が、生涯を貫く課題意識となつた。

天養二年（一一四五）、法然は、比叡山に登る。幼き日の魂の傷口は大きいだけに、法然は類い稀な苦闘を続けた。久安六年（一一五〇）十八歳のときに、西塔黒谷の叡空のもとに蟄居した。

上人黒谷に蟄居の、ちは、ひとへに名利をすて、一向に出要をもとむるころ切なり。これによりていづれの道よりか、このたびたしかに、生死をはなるべきといふことをあきらめむために、一切経を披閲すること数遍にをよび、自他宗の章疏まなこにあてずといふことなし。

〔同〕第四卷・法然伝全一一頁

ここに法然は、出離生死を求めて、山林修行の厳しい伝統のある比叡山で、熾烈な求道を歩んだので

ある。ときには、嵯峨の清涼寺に参籠し、また諸宗の碩学を諸方に訪ねて道を問うた。若き法然の勉強ぶりは徹底していた。一切経をひらき見ること五遍に及んだ。しかしながら法然の病める魂は、それによつてついに癒されることはなかつた。

凡夫の心は、物にしたがひてうつりやすし、たとえば猿猴の枝につたふがごとし、まことに散乱して、動じやすく、一心しづまりがたし。無漏の正智、なに、よりてかおこらんや。若無漏の智剣なくばいかでか、悪業煩惱のきづなをた、んや。悪業煩惱のきづなをた、ずば、なんぞ生死繫縛の身を、解脱することをえんや。かなしきかな、かなしきかな、いかゞせん、いかゞせむ。

こゝに我等ごときはすでに戒定慧の三学の器にあらず。

〔同〕第六卷・法然伝全二五―六頁

この記述が伝えるように、法然は、必死の修学の過程のなかで、「生死繫縛の身」として自己を見出すばかりであつた。この苦闘のなかで、上人は、浄土門の念仏の教えに出遇うのである。念仏門との出遇いにおいて大きな導きとなつたのは、源信の『往生要集』であつた。

聖人みづから浄土門にいる濫觴をかたりてのたまはく、われむかし出離の道にわづらひて寢食やすからず、多年心労ののち『往生要集』を披覽するに、序にいはいはく、「それ往生極樂之教行は、濁世末代の目足なり。」……このゆへに予『往生要集』を先達として浄土門にいるなりと。



「一期物語」によれば、法然の浄土門帰入の先達をなしたのは、『往生要集』であるが、しかし出離の決定を与えたのは善導の積であったとしている。すなわち、

抑恵心先徳往生要集ヲ造テ、濁世末代ノ道俗ヲ勸ム、之二就テ出離之趣ヲ尋ネント欲ス。：是故ニ往生要集ヲ先達ト為シ而浄土門ニ入ルナリ。此宗ノ奥旨ヲ窺ウニ、於善導ノ二反之ヲ見ルニ往生難ト思ヘリ。第三反度ヒ乱想ノ凡夫、称名ノ行ニ依リテ往生ス可キ之道理ヲ得。但自身出離ニ於テ已ニ思ヒ定メ畢リヌ。〔一期物語・法然上人伝記（醍醐本）所収・法然伝全七七三―四頁〕

と述べている。とりわけ善導の『観経疏』が回心に決定的な影響を与えたことは、法然自身が『選択集』の総結に、

貧道、昔茲ノ典ヲ披閱シテ、ホボ素意ヲ識リ、立ドコロニ余行ヲ舎テ、云ニ念仏ニ帰シヌ。其レヨリ已来、今日ニ至ルマデ、自行・化他、タダ念仏ヲ緯トス。

〔『選択集』結勸・真聖全一―九九三〕

と述べていることから明らかである。以上のように、法然は、承安五年（一一七五）春、四十三歳の年に念仏門に帰した（『法然上人行状絵図』第六卷・法然伝全一四頁）のであるが、ことに『観経散善義』の一節が法然の心に響いたことを伝記は伝えている。

然問なげきく経蔵にいり、かなしみく聖教にむかひて、手自ひらき見しに善導和尚の観経

の疏の、一心専念弥陀名号、行住坐臥不問時節、久近念々不捨者、是名正定之業、順彼仏願故。といふ文を見得てのち、我等がごとくの、無智の身は偏にこの文をあふぎ、専このことばかりをたのみて、念々不捨の称名を修して、決定往生の業因に備べし、たゞ善導の遺教を信ずるのみにあらず、又あつく弥陀の弘誓に順ぜり、順彼仏願故の文ふかく魂にそみ、心にとゞめたるなり。

〔『法然上人行状絵図』第六卷・法然伝全一四六頁〕

この一文に巡り会って、法然は「歓喜の余に：感悦髓に徹り、落涙千行」（『黒谷源空上人伝』法然伝全七九六頁）したといわれる。末世に生きるあらゆる凡夫に出離生死を成就する道は、本願念仏の教え以外にはない、と法然は確信した。そしてこれ以後、世に本願念仏の道を唱道することになる。

#### b. 法然思想の展開過程

法然の思想の展開過程をみると、その著述の成立順序を推論し、その順によって窺うという方法は、自然なことと思われる。このような方法にたった見方として代表的なものは、石井教道氏の区分である。石井氏は、『昭和新修法然上人全集』の第一輯「教書篇」の収載順序について、その序文に、思想史的に編輯しようと試みたとされる。すなわち、